



Title	直喩的な日本語、隠喩的なフランス語
Author(s)	春木, 仁孝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 31-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62079
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

直喩的な日本語、隠喩的なフランス語

春木 仁孝

1. はじめに

本稿は、様々な領域における名付けの方策（名詞レベル）と、述部における動詞と様態の言語化に関して、日本語は一般的に直喩的な手段を選択し、フランス語は隠喩的な手段を選択することが多いことを例証することを目的としている。

比喩的な名付けの方策という名詞レベルの現象に関しては、動物と道具類という二つの意味領域の関係について、既に川口順二氏が複数の論文（川口 1998, 1999a, 1999b）で仏英独日の各言語について多くの例を挙げて考察を加え、特にメタファーの方向性という観点から示唆深い論を展開している。そして川口(1999a)で以下のように述べている。

「日本語では1)「動物名→道具名」でも2)「道具名→動物名」でも単純語そして単純形さえも（状況に強く支えられない限り）希であることを第2節で見た。これは日本語が直喩を好み、逆に隠喩を避ける傾向にあることを物語る。」（川口 1999a : 367）

本稿はこれら川口氏の研究に示唆を受け、さらに多くの領域で日本語は直喩的であり、一方、フランス語は隠喩を好むことを確認すると同時に、この考えがとりわけ日本語の副詞的オノマトペがフランス語ではどのように表現されるかという考察を通して、広く動詞と様態の関係にまで拡張できることを主張する。

2. 動物と道具類

2. 1. 動物から道具類へ

まず動物をソースドメインとし、道具類をターゲットドメインとする命名の例を挙げる。

a) フランス語における隠喩的な例：

以下はすべて川口氏の論文に引かれている例である。川口氏も指摘しているように、*bélier* や *mouton* などは木の梁や破城槌のはしに羊の頭の飾りが付いていたものであり、*robinet* は昔、水の出口に羊の頭の飾りが付いていることが多かった故の命名であるので、これらはメトニミーも関与している。*chevalet* (*cheval* 馬+縮小辞)：イーゼル (<オランダ語 *ezel* 「ロバ」)；*bélier* (去勢していない雄羊)：木の梁→破城槌 (英：*battering ram*)；*mouton* (去勢した雄羊)：杭打ち機、ドロップハンマー (英：*ram*)；*grue* (鶴)：クレーン；*girafe* (キリン)：マイクロフォン用のブーム；*chenille* (芋虫、毛虫)：キャタピラー；*puce* (蚤)：集積回路のチップ；*souris* (ハツカネズミ)：マウス；*robinet* (古仏：羊)：蛇口；*mouette* (カモメ)：救命ボート；*cochonnet* (子豚)：ペタンクの的玉。これら各例の転義のプロセスの詳しい説明については川口(1998, 1999a)を参照されたい¹。

b) 日本語における直喩的な例：

「コウモリ傘」、「猫足膳」、「猫車」(土砂を運ぶ一輪車、細い板の上なども猫が歩くように

¹ 以下、特に日本語については必要と思われる場合は最低限の由来を説明するが、詳しくは百科事典類を参照されたい。

うまく土砂が運べるので)、「たこ胴突き」(何本もの持ち手がたこの足を思わせる)などが川口氏の論文に挙げられている。さらに以下の例を付け加えておく。基本は形からだが、一部は動作の類似性による命名である。「墓(かえる)股」(和様建築でもと梁の上に置かれていて構造の一部だったが、後に装飾になり、蛙が足を広げた姿に似ていることから)、「犬釘」(レールを枕木に固定するための金具、初期のものはレールを押さえる部分が犬の鼻面を、引き抜く時のための両側の突起が犬の垂れた耳に似ていた)、「海鼠壁」(瓦を並べて貼り、目地(継ぎ目)に漆喰を盛り付けて塗った壁、その目地がナマコに似ている)、「蝶番」、「交喙(イスカ)継ぎ」(イスカは鳥で針葉樹の種を食べ易いように鋭いくちばしが互い違いになっている、イスカのくちばしのように細い木材を継ぐときにそれぞれの木材の端を互い違いに削って合わせる継ぎ方)、「千鳥格子(英: hound's tooth)」(千鳥が連なって飛んでいるように見える形の格子柄)、「鯉木」(神社建築などで屋根に装飾的に付けられた部材で鯉節に似ている)、「鼠花火」。ところで、明治まで用いられた消火用手押しポンプを「龍吐水」というが、道具(ポンプ)から出てくる水を道具のメトニミーと考えればここに分類することができるだろう。

c) 日本語にも単純語、すなわち隠喩的な例も存在している。川口氏は作業台などを指す「うま」、弦楽器の「駒」、「蛇口」などを挙げている。さらに「鶴嘴」、「鳶口」、地ならしに使う「とんぼ」を挙げておく²。川口氏も指摘するように「ねこ」、「たこ」などは単純語(隠喩)ではなく b) に挙げた語の省略形である。因みに植物から道具類への例として「撒菱」(元は菱の実が使われたが、後には木や竹、時に鉄で作られ忍者が逃亡時に用いたもの)、「散蓮華」、「菊割れ」などが思い浮かぶが、少なくとも前の二つは隠喩的と言えるだろう。

2. 2. 道具類から動物へ

川口氏は我々は動物により親近感を持つので、道具のなかに動物を見ることがより一般的であり、その逆は少ないと言う。確かにそのような方向での命名はフランス語には少ないが、直喩的な形による命名をする日本語には意外とこの方向での例が多い。

a) フランス語における隠喩的な例:

川口氏は *frégate* (フリーゲート艦): 軍艦鳥 (英: *frigatebird*); *échasse* (義足、竹馬): 足長鷺、背高鷺; *espadon* (*épée* 剣+接尾辞): めかじき (*épée de mer, poisson-épée* とも) (英: *swordfish*); *luth* (リュート): おさ亀 (*tortue luth* とも); *scie* (のこぎり): のこぎりえい (*poisson-scie* とも) などを挙げている。他に *sabre* (サーベル): 太刀魚 (英: *scabbardfish* さや+魚) (*poisson sabre* とも); *marteau* (金槌): 撞木鮫 (*requin-marteau* とも) などが思い浮かぶ。隠喩的な単純形と直喩的な複合形が併存している場合、必ずしも単純形は省略によるものではないと思われるが³、さらに調査が必要である。

b) 日本語における直喩的な例:

日本語では音・形・動きの類似からの直喩的な例が多い。川口氏が挙げる例は、「鈴虫」、「轡

² 動物から植物への隠喩的な例として「鶏頭」がある。他に「犬のふぐり(牧野富太郎の命名)」「竜宮の乙姫の元結いの切り外し(甘藷の別名)」などがあるが、一般的な命名とは言えないだろう。

³ たとえば太刀魚の料理のレシピを見ると、*sabre (noir)*と単純形が用いられている場合が圧倒的に多い。

虫」(くつわ=馬の口にかませる金具、ガチャガチャとも言う)、「甲虫」、「鍬形虫」、「へら鷺」、「野槌蛇(いわゆる槌の子)」「(ずんぐりした形が野槌を思わせる)、「障泥いか(あおり=馬の泥よけに動きが似ているところから)」、「槍いか」などであるが、さらに以下の例を付け加えておく⁴。「蓑虫」、「油蟬(色または鳴き声から)」、「糸蜻蛉」、「撞木鮫」、「鋸鮫」、「甚兵衛鮫(模様が甚兵衛に似ているところから)」、「太刀魚」、「鉄砲魚(口から水を発射して餌にする虫を撃ち落とす)」、「糸巻きえい(頭部にある鰭が糸巻きに似ている)。隠喩的な例としては、川口氏の挙げる「オタマジヤクシ」、「くちなわ(く朽ち縄)」があるが、川口氏の指摘にあるように蛇を意味する「くちなわ」は現用ではない。一部の方言、および短歌・俳句などで詩語として使用される。また「オタマジヤクシ」については、道具は現在では「お玉」か「玉杓子」であり、共時的には直接にはつながらない⁵。「カブト」、「クワガタ」はもちろん、単純語ではなく省略形である。

2. 3. 行為から動物へ

日本語が直喩を好むということは、名前の最後に範疇を表わす要素が付くということである。実際、<行為+範疇名>という命名形式も日本語には多い。この場合も「～のように見える行為をする X」という比喩と考えれば直喩と分類することも可能であろう⁶。以下のように虫の名前に多い。「馬追虫(鳴き声が馬子が馬を追う声に似ている)」、「髪切り虫」、「屁ふり虫(屁こき虫)」「(防御のためにおしりから音をたてて白いガスを吹く)」、「尺取り虫(物差しで長さを測る=尺を取るように移動するところから)」、「泡吹き虫(泡のような巣を作る)、虫ではないが衣服に棘のある実がくっつくところからこの名前がある「ひつつき虫(くつつき虫)」、そして植物に「おじぎ草」がある。

また行為に関して、日本語には連用形の名詞化で「～するもの」を表わす手段が存在する。連用形が英語の-er、フランス語の-eurなどに対応すると考えれば、「～する生き物」を表わすので、上記に準ずると考えることもできる。虫の「鉦叩き(鳴き声から)」、「道教え(ハンミョウ)」「(人が近づくと少し前に飛び道を教えているように見えるところから)、「糞転がし」、鳥には「キツツキ」、「虫食い(センダイムシクイなど)」、「葎切り(中にいる虫を捉えるために葎の葉を切るからとか、葎の葉を切り裂くような鳴き声からとか、あるいは葎潜り(ヨシクグリ)から転じたなどの説がある)、「鱒刺し(鱒などの小魚を捕らえるのが上手なところから)、「菱食い(菱の実など植物を食べる)、「火焚き(ジョウビタキなど)」「(鳴き声が火打ち石を打つ音に似ている)、さらに「蟻食い」などの例がある。「髪切り」、「馬追」といった省略形も連用形の名詞化という手段に支えられていると言える⁷。

さらに鳴き声の見なしが名前になっている場合でも、漢字表記の最後に「～する者」的な要素が付くことが多いのは日本語的ということが出来る。例には「つくつく法師」、「仏

⁴ 道具から植物への直喩的な例として「白粉花(オシロイバナ)」「(種子に粉状の胚乳があり子供達がおもしろいに見立てて遊んだところから)を挙げておく。また虫から動物への直喩的な例として「蛍鳥賊」がある。

⁵ 道具から植物への隠喩的な例として「数珠玉」(実はつやがあり子供達が糸を通して数珠など作った)がある。

⁶ このタイプは川口氏の論文の対象にはなっていない。

⁷ 「馬追虫(ウマオイ)の鬣のそよるに秋はまなこを閉じて想い見るべし」(長塚節)のような表記からも「馬追」が省略形であることが分かる。

法僧」⁸、「行々子」（葎切りの別称）、「郭公」などがある。

3. 童話の主人公、剣、船など

フランス語では童話の主人公にも隠喩的な命名が見られる。Blanche neige（白い雪）「白雪姫」、Cendrillon (cendre 灰+接尾辞)「灰かぶり姫、シンデレラ」、Le petit Chaperon rouge（小さい赤い頭巾）「赤頭巾ちゃん」、Le petit Poucet（小さな親指）「親指トム」（cf. 英：Tom thumb）、La barbe bleue（青い髭）「青髭」。最後の例以外は日本語では人であることを示す要素がないと、タイトルなど以外では不自然である。

また刀にはよく名前が付いているが、ここでも欧米では Excalibur（アーサー王伝説）、Durandal（「ローランの歌」）のように固有名詞的である。一方日本語では「～丸、～剣、～切」のように刀であることを表わす要素がついて直喩的である。「小烏丸（御物）」、「水龍剣（重要文化財）」、「山姥切（重要文化財）」、「石切丸（石切剣箭神社の神刀）」、「村雨丸（『南総里見八犬伝』）など。ただし観世正宗、鉾切長光型の名前も多いが、この場合も刀工の名前がメトニミーで「刀」を意味していると考えれば「～丸」などと同じになる。ちなみに笛の名にも「～丸」が多い⁹。「丸」は人を表わす「麻呂」に由来する。

丸と言えば、日本語では船の名前も一般に「～丸、～号（カタカナ名の場合）」をつけて船であることを明示するのが一般的である。「坂東丸」、「咸臨丸」、「日本丸」、「第五福竜丸」、「サンフラワー号」など。欧米の船の名前の翻訳でも「タイタニック号」、「ノーチラス号」のように一般に「号」を付ける。欧米では「空母ロナルド・レーガン」「空母シャルル・ド・ゴール」のように実在した人物の名前をそのまま船に付けることもあるが、日本語ではやはり「空母～」「～号」のような形にしないと不自然である¹⁰。一方、軍艦、自衛艦は「三笠」、「武蔵」、「周防」、「おやしお」のように丸を付けないのが一般的であるが、これには民間船との差別化という意図があるのかもしれない。

川口(1999b)には河川名についても言及がある。フランス語は La Seine「セーヌ川」や La Loire「ロワール川」のように文法性に一致した定冠詞は付くが、日本語のように「川、河」は付かない。ただし外国の川については、Le fleuve Yodo「淀川」（fleuveは海に注ぐ川を意味する男性名詞）のように表記することもあるが、一度川であることが分かれば以降は Le Yodo の様に表記するのが一般的である。

4. 普通名詞の比喩的拡張

フランス語ではパンやケーキの名前も隠喩的である。baguette（細い棒）「バゲット」、croissant（三日月）「クロワッサン¹¹」、épi（麦などの穂）「エピ」、Mont Blanc（白山）「モ

⁸ 「仏法僧」は仏教の三宝を表わしているが、やはり人を指す僧が最後にあるので落ち着く感じがある。なおこのように鳴くのは実際は「木の葉木菟」である。

⁹ ただし歴史上の笛の名前には見立てによる隠喩的な名前も同時に多いようである。

¹⁰ アメリカでは USS(United States Ship) Ronald Reagan のように USS が、フランスでは Le Charles de Gaulle のように定冠詞が付くことが日本語の「号」などと同じ役割をしているのかもしれない。

¹¹ クロワッサンには「三日月パン」という名前が使われていたこともある。

ンブラン」、*religieuse* (修道女)「ルリジューズ (形と色が修道女を思わせる)」、*bûche de Noël* (クリスマスの薪)「ビュッシュ・ド・ノエル (薪の色と形をしている)」、*mille-feuille* (たくさんのパイ生地)「ミルフィーユ」、*barbe à papa* (お父さんのひげ)「綿菓子、綿飴 (東日本)」、*langue de chat* (猫の舌)「ラングドシャ」、*tête-de-nègre* (黒人の頭)「テット・ド・ネーグル¹² (丸くてチョコレートでコーティングされている)」、*chou à la crème* (クリーム入りキャベツ)「シュークリーム」など。「*棒パン」「*修道女ケーキ」のように日本語の直喩的な形にしても落ち着かないのは、食べ物を直接的に物と結びつける名付けの方法そのものがあまり日本語的ではないとも考えられる。もちろん日本語にもこのタイプは存在するが「メロンパン」は食べ物からであり、「鏡餅」は元々は飾る物であるし、「菱餅」は菱形という形からであり、「うぐいす餅」は色からであってフランス語のように人に比定したり、物と直接的に結びつく例は少ない。「三笠まんじゅう」も奈良の三笠山という景色の形との比定である¹³。菓子の名などで日本語に一番多いのは、<材料名/地名+餅、まんじゅう>などの形であり、直喩ではないもののカテゴリー名が最後に付くことが多い。

ただし、茶菓子など和菓子には見立てや和歌の一節などによる隠喩的な銘も多い。いくらでも例はあるが、たとえば「若草」、「月見うさぎ」、「下萌え」、「花筏」など季節を思わせる名前が多い。また「石走る垂水の上の早蕨の萌え出づる春になりにはけるかも」から「早蕨」、「東風吹かばにほひおこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ」から東風 (コチ) といった具合である。茶菓子だけでなく茶碗、茶入れ、茶杓など茶道具にも見立てによる隠喩的な銘が多いが、茶の世界は古くは富有な階級のものであり、直喩的な日本語の中で隠喩的な銘を使うことでいわば差別化をはかって「かつこよさ」を出していたとも言える。

最後に日本語の隠喩的な面としてオノマトペそのものによる命名を挙げておこう。「ガチャガチャ (轡虫)」、「スイッチョ (スイッチョンとも) (馬追虫)」¹⁴、「シュー (シュッシュ) (噴霧式殺虫剤)」(cf. 仏: *pschitt*, *pscht(t)*)、赤ん坊をあやす「ガラガラ」、「プチプチ (気泡緩衝材)」、抽選の「ガラポン (ガラガラとも)」、棘を意味する「イガイガ」、料理の「シャブシャブ」、「ハリハリ鍋」、商品名の「ポッキー」、「ガリガリ君」、「ピコピコ」など。幼児語の「ワンワン」、「ポンポン」なども隠喩的である。なお、このような場合を隠喩的と見なせるかどうかについては異論もあるかと思うが、機会を改めて考察したい。

5. オノマトペ (マナー) と動詞

ここまでは命名という名詞レベルを見てきたが、ここからは直喩的、隠喩的という日本語とフランス語の違いが、動詞とマナーの表現についても見られることを示す。

日本語ではオノマトペを「(と) / (という) 音をたてる」「(と) いう」「(と) 鳴く」のように引用的に用いるが、これは直喩的と言える。他方、フランス語は擬音的な部分が動

¹² この名称は現在では *tête au chocolat* など幾つかの言い換えがなされているが、隠喩的であることには違いはない。

¹³ 三笠山は若草山の別称。なお、東日本で言う「銅鑼焼き」は銅鑼の形からである。

¹⁴ 「かなかな蟬」(夕方に鳴くことから蝸 (ヒグラシ=日暮らし) とも呼ばれる)、「にいにい蟬」などはオノマトペを用いながらも形は直喩的である。

詞の中に取り込まれており、隠喩的であると言える。この点については、春木(2012b, 2013)で論じた。多少重なることになるが、以下に例を挙げる。

- gargouiller** 「水がゴボゴボという（音をたてる）、お腹がグルグル（と）いう」：
例) *Ça gargouille dans le ventre.* 「お腹がグルグルいってる」
froufrouter 「(衣服、木の葉などが) サラサラ（と）軽い音をたてる」
例) *Ça froufroute dans la boutique.* 「お店ではいろんな服があなたを呼んでいる」
glouglouter 「(液体が) ゴボゴボ、ドクドク、ブクブク（という）音をたてる」
se craqueler 「罅が（ピシッと）はいる」、**se fissurer** 「罅がはいる」
ronronner 「猫が喉をゴロゴロ（と）鳴らす」
susurrer 「ささやく、(小川、葉) などがサラサラ（と）音をたてる」
murmurer, chuchoter, marmonner 「ささやく、つぶやく」
vrombir 「(エンジン・虫などが) ブンブン、ブルンブルン（と）いう」
bavarder, bavasser, babiller, jacasser, jacter, jaser, caqueter, papoter, babiller, tchatcher 「ぺちやくちやおしゃべりをする」

日本語ではオノマトペで表わす動物や鳥の鳴き声もフランス語では動詞そのもので表わされる。その数は軽く 100 は超すが、その一部を以下に挙げる。

- piailler, piauler, pépier, piauter** 「鳥がぴいぴい鳴く」
gazouiller 「鳥がさえずる、水がせせらぐ」
bêler, bégueter 「羊・山羊がメーと鳴く」
coasser 「蛙がクワックワツと鳴く」
coqueriquer 「雄鶏がコケコッコーと鳴く」
croasser 「鳥がカーカーと鳴く」
roucouler 「鳩がクウクウと鳴く」
nasiller 「あひるがガアガア鳴く」
tirelirer 「ヒバリがさえずる」(日本語ではピージョルピー チョフなどと表記)
boubouler 「フクロウがハウハウと鳴く」
titiner 「四十雀などが鳴く」
aboyer 「犬がほえる」
grogner, grouiner, couiner 「豚などが鳴く」
hennir 「馬がヒヒーンと鳴く」(cf. いななく)
beugler, meugler, mugir 「牛がモーと鳴く」
miauler 「猫がニャオ、ミャオと鳴く」

日本語にも擬音語的(隠喩的)な動詞も若干ある: 「ささやく」、「つぶやく」、「せせらぐ」、「すする」、「いななく」、「がなる」、「おらぶ」、「ゆらぐ」、「きらめく」、「き(ん)ぎめく」、「びくつく (cf. 怖じ気づく)」、「いらつく」、「ふらつく」、「よたつく」、「ぱくつく (cf. 食いつく)」など。ただし「～なく」、「～めく」、「～らぐ」、「～つく」は接尾語であり、「～の

ように鳴く」「～のようになる」という意味を表わすので、起源的には直喩的である。

最後にフランス語のオノマトペの名詞的使用について述べておく。オノマトペそのものは間投詞と言えるが、フランス語では名詞として目的語などになることもある。そのような場合は「～という音をたてる」のようになる直喩的な日本語とは違ってやはりフランス語は隠喩的であると言える。たとえば *froufrou* (>*froufrouter*)「サラサラという音(衣擦れ、葉叢、小川、羽根など)」、*glouglou* (>*glouglouter*)「ゴボゴボ、ドクドク、ブクブク、トクトクという音」などを以下のように目的語などとして用いることができる。

例 1) *Le vin versé fait glouglou dans le verre.*

the wine poured makes glouglou in the glass

「注がれたワインがグラスの中でトクトクと音をたてている」

2) *Il entend un froufrou de robe de soie dans l'escalier.*

He hears a froufrou of dress of silk in the-staircase

「彼には階段で絹の服の衣擦れの音がするのが聞こえる」

3) *[...] deux... trois ronrons d'avion très loin [...].*

two three ronrons of-plane very far

「とても遠くに飛行機のブーンという音が2回, 3回...」

以上の例でも分かるように、名詞として用いられる場合でも、冠詞を伴うときと伴わないときがあったり、複数であっても複数のマーカーの-s が付く場合と付かない時があったりと、名詞としての扱いに揺れが見られる。つまり、いまだ完全には名詞として認定されていないとも考えられる。一方、オノマトペ的動詞語幹や間投詞的オノマトペに名詞形成語尾である *-ment* を付けた形もある。たとえば、動詞 *crépiter* から作られた *crépitement*「パチパチいう音」、動詞 *bourdonner* から派生された *bourdonnement*「ブンブンいう音、ざわめき」など。また *ronnement*「猫が喉を鳴らす音、機械がうる音」は動詞 *ronronner* から派生されたのかオノマトペ *ronron* から作られたのかは分明ではない。これらの場合のようにオノマトペと *-ment* 型の名詞が併存しているときには、歴史的経緯などで両タイプそれぞれの名詞としての使用頻度は様々なようである。

6. 音以外のマナー（様態）と動詞

6. 1. 接尾辞の付加による場合

さて、フランス語では音以外の様態に関しても、基本となる動詞の語形に一部変化を加えて動詞そのもので表わす場合が多く見られる。基本的には不定詞語尾の前に接尾辞（接中辞）が付くが、それに伴って語幹の母音に変化が現われる場合もある。

trembler「揺れる」→ *trembloter*「小さく揺れる、かすかに揺れる」

pleuvoir「雨が降る」→ *pleuviner, pluviner, pleuvasse, pluvioter, pluvioter*「小雨(小糠雨)が降る」¹⁵

¹⁵ 英語では「小雨が降る」という動詞は *drizzle, mist, mizzle* とオノマトペ的である。

neiger「雪が降る」→ neigeoter, neigeasser「小雪が降る」
 pleurer「泣く」→ pleurnicher「泣き真似をする、涙声を出す」
 pleuroter「ちょっと泣く」
 nager「泳ぐ」→ nageoter「ちょっと泳ぐ、泳ぎにくそうに泳ぐ」
 dormir「眠る」→ dormasser「眠る、い眠る(軽侮的)」、dormichonner「少し眠る」、
 dormoter「少し眠る」
 boire「飲む」→ buvoter「(酒を)ちびりちびり飲む」
 écrire「書く」→ écrivasser「書く(軽侮的)」(あまり意味のないことを書きなぐる)
 manger「食べる」→ mangeailler「少し食べる、つまむ」、mangeotter「少ししか食べ
 ない、食欲がないのにしょっちゅう食べる」
 baisier「キスをする」→ baisoter「軽く何度もキスをする」
 parler「話す」→ parlotter「無駄話をする、中味のないおしゃべりをする」
 travailler「仕事をする」→ travailloter「適当に働く」
 danser「踊る」→ dansoter「ちょっと踊る、下手に踊る」
 sauter「跳ぶ」→ sautiller「びよんびよん跳ぶ、跳ね回る」
 discuter「議論する」→ discutailier「つまらないことを長々と議論する」
 crier「叫ぶ」→ criailier「わめき散らす、(鳥などが)鳴き騒ぐ」

全体的に評価的な様態、それもマイナスの評価が付け加わっている場合が多い。より具体的には、縮小的、繰り返し、無目的性、試みなどのニュアンスが読み取れる。接尾辞としては-ot(e), aill(e), -ass(e)などを取り出すことができるが、たとえば-asseは名詞・形容詞にもついて、vin「ワイン」→ vinasse「安ワイン」、bon「良い」→ bonnasse「お人好しの」、tiède「暖かい」→ tiédasse「生ぬるくてまずい」のようにマイナスの意味を付加する。

以上のようなフランス語に対しては日本語はやはり様態を動詞の外に出して表わすが、日本語にも程度の高さをプラスする動詞接頭辞が若干ある。たとえば、「ど突く」、「どなる」「ひっころがる」、「すっころがる」、「すっ飛ぶ」、「かつ飛ぶ」、「ぶっ飛ぶ」、「おったまげる」、「ぶったまげる」、「ぶちぎれる」、「ぶん殴る」、「ひん曲がる」、「ぶっ倒れる」、「おっ死ぬ(ちぬ)」「ひょごいがむ(関西方言)」などに付く接頭辞である¹⁶。音便形が多い。

6. 2. 語彙による変化

フランス語では、以上のように接尾辞の付加による場合だけでなく、語彙そのものによって基本的な意味に様態を加えた意味を表わす動詞が豊富である。フランス語における動詞と様態の関係について考察した Molina et Stosic (2016)に多くの場合が挙げられているが、その一部を以下に引いておく。

たとえば、rire「笑う」、rigoler「笑う」(口語的)を基本的な動詞とすると、sourire「ほほえむ」、glousser「くっくっ笑う」、ricaner「冷笑する、せせら笑う」、rioter¹⁷「薄ら笑

¹⁶ なお、「ぶち込む」は「打ち込む」の音変化であり、「かつさらう」は「掻きさらう」、「かつこむ」は「掻き込む」からなので、結果的には同じグループに属しているように感じられるが、いずれも起源は複合動詞である。

¹⁷ rioterは6.1の接尾辞のタイプになる。

いを浮かべる」、s'esclaffer「大きな声をあげて笑う」、se bidonner「腹をかかえて笑う」など、様々な笑い方を表わす動詞がある。

また、manger「食べる」、bouffer「食べる」（口語的）を基本的な動詞とすると、avalier「飲み込む、急いで食べる、むさぼる」、bâfrer「がつつ（たらふく）食べる」、croquer「ぱりぱり（かりかり）たべる、かじる」、dévorer「むさぼり食う」、s'empiffer「たらふく食べる」、s'envoyer「（たらふく）食べる」、gober「飲み込む」、se gaver「たらふく食べる」、grignoter「少しづつかじる、軽く食べる」、savouurer「味わって食べる」のようにやはり様態を付加した動詞が多くある。

他にも dire「言う」を基本として、様々な言い方を表わす動詞がある。たとえば affirmerは「断言する、断定する」のように訳せる場合もあるが、結局は「はっきり言う、強く言う」のように「言い方」の一つを表わしているのである。以下に列挙する動詞も煩雑になるのでいちいち訳はつけないが、直接語法や間接語法を伴って用いられることが多く、やはり「どのように言うか」をそれぞれ表わしている動詞であると考えられる。déclarer, signaler, ajouter, révéler, indiquer, exprimer, prononcer, exposer, annoncer, témoigner, communiquer, raconter, remarquer, énoncer, prétendre, etc.

以上のようなフランス語に対して、日本語では基本的にマナーは動詞の外に出して表現することが多い。言い換えれば＜基本的な意味＋マナー＞をその意味とする動詞が少ないと言える。もちろん「冷笑する」「大笑する」「暴食する」のように＜漢語＋スル＞型でマナーを含む動詞はあるが、本来の大和言葉には少ないということである。＜漢語＋スル＞型も、＜名詞＋スル（動詞）＞という構造で考えれば、様態は名詞として動詞の外に出ており、やはり起源的には直喩的といえる。

また、日本語には当て字という現象がある。たとえば「みる」に対して「見る」だけでなく、歴史的には「観る、看る、視る、覧る、窺る、察る、…」のように様々な当て字が用いられてきた。これは、様態を含まない大和言葉の「みる」に様々な漢字をあてることで視覚的に様態を取り込んでいると解釈できる。これも本来の日本語では様態を含まず、様態は必要に応じて動詞外の要素で表わすというのが一般的であるからこそである。

7. まとめ

本稿では川口氏の研究に示唆を得て、ものの命名において比喩が働くとき、日本語は直喩的な形で表現するのが一般的であり、一方フランス語は隠喩的に表現するのが一般的であることをみた。またこの傾向は述語レベルにおいても見られ、フランス語が様態を動詞の中に隠喩的に取り込んでいることが多いのに対して、日本語はオノマトペの場合などから分かるように、様態を動詞外の要素で直喩的に表現するのが一般的であることを示した。

本稿では直喩的・隠喩的という大きな傾向を見たので、個々の場合における転義の詳しいプロセスについては検討していない。また本稿でも指摘したように実際にはこの大きな傾向に反する例外的な場合もあり、それらのさらなる説明も必要である。また、比喩的な

命名については動物→道具類は多いが、その逆は少ないという川口氏の指摘に対して、日本語には意外にその方向の命名も多いことを見たが、それは日本語が直喩的な形を用いることと関係があるのではないかと思われる。つまり、たとえば鈴の様な音をたえる虫を外から見て、それを直接、鈴とみなして「すず」と呼ぶのはフランス語においては可能であるかもしれないが、日本後では不自然である。そのような場合、日本語では一旦虫に共感して虫の立場に立って鈴の様な鳴き声をたてる虫と考えて、「鈴虫」というような命名が結果として出てくるのである。つまり、最後にカテゴリーを表わす要素があるということは虫や動物の視点に立った上で、虫や動物の側に道具類を引っ張ってくるのである。隠喩的な場合は、ソースドメインのある要素とターゲットドメインある要素を直接的に比較しているのであるが、日本語では比喩的転義が成立するときには隠喩的なフランス語にはないステップがもう一つあり、そのために道具→動物という方向性での比喩的命名がより使われやすいのではないだろうか。また、本稿で見たことがIモード、Dモードという観点にどのように関わってくるのかについてもさらに考察が必要である。

参考文献

- Molina, Estelle et Dejan Stosic (2016) *L'Expression de la manière en français*. Paris : Ophrys.
- Talmy, Leonard (2000) 「イベント統合の類型論」、坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』 pp.347-451.
- 川口順二 (1998) 「動物名から道具名へーメトニミ、メタファ、意味の変化ー」 藝文研究 75 : 112-127. (慶應義塾大学藝文学会)
- 川口順二 (1999a) 「ふたたび動物名をめぐって」 藝文研究 77 : 362-376. (慶應義塾大学藝文学会)
- 川口順二 (1999b) 「命名における直喩と隠喩ー動物、道具、そして河川の名称ー」 筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書 III-2 : 901-914.
- 中村芳久 (2009) 「認知モードの射程」, 坪本篤郎他 (編) 『「内」と「外」の言語学』 開拓社 pp.353-393.
- 春木仁孝 (2011) 「フランス語の認知モードについて」 『言語における時空をめぐって』 IX : 61-70. (大阪大学大学院言語文化研究科)
- 春木仁孝 (2012a) 「フランス語における事態の認知方策について」 『言語文化研究』 38 : 45-65. (大阪大学大学院言語文化研究科)
- 春木仁孝 (2012b) 「フランス語におけるオノマトペ効果について」 『川口順二教授退任記念論文集』 (ウェブ出版 : http://web.keio.jp/~kida/hommage_kawaguchi.pdf)
- 春木仁孝 (2013) 「フランス語のオノマトペーオノマトペの名詞性を中心にー」 『時空と認知の言語学』 II, pp.49-58. (言語文化共同研究プロジェクト 2012, 大阪大学大学院言語文化研究科)